

理窓会新年茶記



▲「坊っちゃん賞」受賞者の写真

理窓会
インタビュー

理窓会とは、卒業と同時に自動的に会員となる校友会であり、本学と本学卒業生との絆を結び役割を果たしている。理窓会の歴史は古く、1881年に設立された東京物理学校同窓会にまで遡る。現在では「世界の理科大」を目指し北カリフォルニア、上海、シンガポールにも支部が置かれている。今後はインドネシアとマレーシアにも支部を設置する予定だそう。今回は理窓会で行われている「坊っちゃん賞」および「三

世代理窓会会員特別賞」を中心に、理窓会副会長を務めている渡邊一郎さんに話を伺った。

坊っちゃん賞は1999年に同窓の博士号取得者が二人を超えたことを記念して創設され、これまでに58名が受賞している。この賞は大学や企業などの教育に携わり本学の名声に多大に寄与した同窓に、新年茶話会において賞状と盾を贈呈し、その榮譽を称えるものとしている。科学の分野に限らず社会や文化の分野で活躍した同窓も対象となり、元日本テレビアナウンサーの楠田被里子さんと書道家の武田双雲さんも受賞されている。今年（平成27年）は火災研究の発展と国際化への貢献をされた鈴木弘昭さん、日本の中学校教育の発展に尽力をされた小野具彦さん、厚板精密板金を通して日本のものづくり技術の継承と挑戦をされた富田英雄さん、科学技術を用いた芸術における国際的貢献をされた真鍋大度さんの4名が受賞された。さらに、坊っちゃん賞の他にも中学生、高校生の科学への興味や関心を高める目的で「坊っちゃん科学賞」というものがある。こちらは全国の中学生、高校生を対

象に科学論文を募集し、応募された論文の中から優秀な論文が5本ほど選ばれ、理窓会が毎年秋に主催するホームカミングデーにて表彰される。

また、2009年に新年茶話会が100回目を迎えたことを記念し、三世代理窓会会員特別賞が創設された。この賞は三世代にわたり本学（物理学校、諏訪・山口東京理科大学も含む）を卒業した家族に表彰される。生存か否かは問わず、最も若い世代は在学生でも良いということになっている。過去に三世代を超えた四世代家族も受賞されており、今後は「四世代理窓会会員特別賞」も検討していくそう。現在、三世代以上の家族が確認されているのは十三世帯であるが、全ての確認には至っていないという。該当する学生は、是非神楽坂キャンパスに隣接するPORTA神楽坂ビル7階にある理窓会事務所へ訪ねてほしい。

これらの賞を受賞するということは、その道の研究や努力を積み重ねてきた証である。たとえどのような立場に置かれても「鶏口となるも牛後となるなかれ」というように、その中でいかに努力するかが大切であるそう。本学の伝統は自ら進んで勉強することであり、苦労や困難は買ってでもしてほしいと渡邊さんは語った。



▲理窓会副会長の渡邊一郎さん

書籍紹介



「本格派ミステリー」という言葉から連想されるシチュエーションはどんなものかと、人に問うてみるとする。すると、十中八九「人が死ぬ」場面が出てくるはずである。今からずつと昔、エドガー・アラン・ポーが最初のミステリー小説を発表した時から、おおよその売れるミステリー作品というのは多かれ少なかれ流血を伴うものだとされている。現代を生きる私たち一般人にとって流血は避けるべきことである。したがって普段あまり血液を目にするのではない私たちは、派手な出血シーンを見たり聞いたり読んだりすると、その凄絶さに強い印象を与えられるのである。

流血関係の最上級のイベントこそが殺人である。このように「殺人＝流血」のイメージが強くなったため、いつしか私たちは流血を必ずしも伴わない殺人――窒息やショック死など――をも強烈なインパクトを生み出すものと認識するようになってきている。ミステリー作家はこのことを知っ

てか知らずか、あるいは意識してか無意識か、読者を惹きつけるために今日も登場人物に人を殺させている。さて、2000年に入ってから、非常に興味深いミステリーのシリーズが書店の店頭に並んだ。その名も角川文庫『万能鑑定士Qの事件簿』シリーズ（以下、『Qシリーズ』と表記する）である。「人の死なない傑作ヒューマンミステリー」と銘打たれたこの作品の著者は、『催眠』や『千里眼』シリーズで有名な松岡圭祐である。『Qシリーズ』はコミック化及び映画化され、今なお多くの人々に愛され続けている。今回は、このシリーズの第一巻・第二巻のごく簡単なあらすじを紹介させていただく。

物語は東京メトロ飯田橋駅の出口付近から始まる。『週刊角川』記者・小笠原は近年世間を騒がせている不気味な「力士シール」の真相究明を命じられ奮闘する過程で「万能鑑定士Q」の店を訪れる。そこで知り合った深田莉子とシールの謎を解明すべく行動を共にしている最中、「力士シール」のことが一瞬で民衆の頭から吹き飛ばすような大事件が発生し、日本全体が大混乱に陥ってしまう。沖繩の波照間島出身で、天真爛漫ではあるが、万全成績最下位だった莉子が、上京してから身につけた広範な専門知識と観察眼に加え、小笠原の助けをもつて、日本を危機から救おうと奔走する。そしてたどり着いた驚愕の結論やいかに。臨場感溢れるテンポの良い文章を楽しんでいただきたい。

シリーズを読み進めていくと、莉子の知られざる過去が明らかになるほか、多種多様な難題に加え、ライバルとなる万能贋作士や、あらゆるものを完全に複製してしまふ「コピア」などをはじめさまざまな個性豊かなキャラクターたちが現れ、万能鑑定士・莉子の前に立ちはかかる。彼女の鮮やかな事件解決の手法もさることながら、鈍感であるがゆえに生じる小笠原とくつついたり離れたりする微妙な距離感も見逃せない。描写の一つ一つが素敵な宝石のように輝いている作品であると言える。

シリーズ全体の構成は、現実世界に起こった少し風変わりな事件をモチーフにしていくことが特徴であり、時には政治などの時事ネタを風刺したりする。また、マスコミやブランドなどが実名で表記されていたり、某大学の学部学科名の変更に伴って作中の登場人物の設定も細かく変更されたりしている。「人の死なないミステリー」でありながら、読者をこの上なく絶望のどん底に突き落とすようなシリアスなシーンが用意されていたり、反対にコミカルな表現で笑いを誘う描写がなされていたりと、読んでいくうちに自然と物語の魅力を感じる。松岡の生み出す巧妙な文章にひとたび触れれば、きつとすぐに彼の世界のとりこになるであろう。書店で見かけたら是非一度本を手にとって読んでみるとうい。また、『Qシリーズ・事件簿』の続編にあたる『推理劇』や『短編集』『探偵譚』『姉妹編』『特等添乗員αの難事件』も合わせて読むことを推奨する。

坊っちゃん焼き

葛飾キャンパスのあるJR金町駅から徒歩10分ほどのところに和菓子屋「岩月」がある。ここでは、本学理学部第二部化学科の卒業生である店主の榎本美佐緒さんが「坊っちゃん焼き」と「マドンナちゃん焼き」というお菓子を作っている。これは本学のマスコットキャラクターである坊っちゃんとマドンナちゃんを形どったたい焼き風の生地の中に、あんこやクリームが入っているお菓子である。坊っちゃん焼きの誕生は本学の葛飾キャンパスに設立を記念するために理窓会の決議のもと誕生したものである。発売後も試行錯誤を重ねられた当初から今でも、改良がされ続けている。坊っちゃん焼きの改良のために各地のたい焼きを食べ歩き、あらゆる生地を試したと榎本さんは語った。今は坊っちゃん焼きが「ぶあん味で、マドンナちゃん焼きがカスタード味」となっている。坊っちゃん焼きの完成形は、おやつとしてだけではなく、食事としても食べられるようにさまざまな味を楽しめるものにしたという。

今考えられている味はあんこにモリンガを混ぜ込んだモリンガ味。モリンガとは、あまりにも高い栄養価を持つているため、海外からは生命の木、緑のミルクとまで呼ばれている植物のことである。このモリンガを含んだあんこは、あんこの味を殺すことなく、またモリンガ自体の味が主張しすぎることなく、あんことうまく調和するそう。だ。以前にはこのシュークリームを買いに芸能人の峰竜太やさまあーずが来たそうである。芸能人

も訪れる岩月のシュークリウムも是非一度味わってもらいたい。坊っちゃん焼きの他にも常に進化を続ける岩月には今後とも目が離せない。本学を卒業して現在和菓子屋の店主というのは異色ともいえる。しかし、本学を出たからといって、理系就職とは限らない。歌手、書道家、銀行員など、多くの卒業生がさまざまな仕事をしている。「他の大学と比べても、理科大は大変だと思う。そして、私は卒業してから10年間は思い通りにいかず、将来について悩み続けた。けれど、それを恐れないでほしい。理科大の苦勞と思うが、実はこのシュークリウム、とても人気なのである。「和菓子屋だからホイップクリームの原料とかよく分からないし、バナナエッセンスとかもよくわかんない。とにかくバナビーンズをたくさん入れちゃう」と語る店主の榎本さん。こうして豪快に作られたシュークリウムは、他では味わうことができないものだ。以前にはこのシュークリームを買いに芸能人の峰竜太やさまあーずが来たそうである。芸能人



▲「坊っちゃん焼き」と榎本美佐緒さん